〔資 料〕

集団形成パターンと公的自己意識の高低が 個人の判断に及ぼす影響¹⁾

九州大学
吉 武 久 美 子

問 題

集団というものを長い時間の経過から考えてみると、集団が形成された後、存続してその規模を増して成長していく集団もあり、また分裂、崩壊していく集団もある。人はこのような集団の変化に対応しながら、その集団に同調したり、しなかったりというように自己の行動を決定していくと思われる。この、集団が変動していく状況下での同調行動を扱ったものはこれまで非常に少なく、わずかに吉武 (1985)、安井 (1985) があるだけである。吉武 (1985) は集団の形成から崩壊にいたる一連のプロセスを設定し、同調行動の変化をおっている。そして形成される多数者意見が Reality の高い意見か低い意見かによって、崩壊期の同調行動の生起率に違いの生じることを見いだした。安井 (1985) は形成する場合 (上昇系列という) と崩壊する場合 (下降系列という) の同調率の違いを比較検討し、形成される場合の方が同調率が高いことを見いだした。しかし、これらの研究では形成のパターンについてはあまり検討されていない。現実場面を考えるに、集団の形成パターンにも、一気に一致団結の機運が盛り上がって多数者が形成されるときや、徐々に皆が一致していくときがあると思われる。このような集団の形成パターンの違いによって、同調行動に違いが生じるのではないだろうか。一気に形成される規範はインパクトが大きく、多くの同調者を生み出すのではないかと考えられる。しかし、その同調はどの程度持続するのだろうか。そこで本研究では形成パターンの違いによる同調行動を比較検討することを目的とする。

また、同調は他者にあわせるために自己本来の意見を変えなければならないことである。非同調は自己の意見を貫くため他者とくい違うことである。このように自己本来の意見を変える、あるいは貫くという一面をもつ同

調、非同調行動は、自己意識というものと深く関わる行動と考えられる。近年、自己意識特性の概念は新しいパーソナリティ要因として社会心理学の研究の中で注目されてきており (押見・渡辺・石川, 1985)、これまで自己意識特性と同調との関係については、Froming & Carver (1981)、石川・渡辺・押見 (1984) において、公的自己意識と同調行動の間に正の相関があると報告されている。これらの結果より、公的自己意識の高い人は多数者に同調しやすいということより、公的自己意識高者は多数者を含めた周囲の状況の変化に敏感に反応するのではないかと考えられる。すなわち、公的自己意識高者は低者より多数者の形成パターンの違いによって自己の反応を変えやすいのではないかと予測される。そこで第2の目的として公的自己意識の高低と規範形成パターンとの関係についても検討を試みる。

方 法

被験者 短大生男女35名。突発型形成条件20名 (男5名, 女15名)。徐々型形成条件15名 (男5名, 女10名)。5人1集団。

課題 ある県で十数年前に行われた (実際は架空の) 首長選挙に関する8個の情報 (Table 1) を読み、4人の候補者A～Dの中から当選者を1人選び答えるという課題 (大学生30名を用いた予備調査より88.67%がDと回答する課題であることが見いだされた) である。装置はクラッチフィールド型。

実験条件 集団の中に突然に急激に多数者が形成される条件が突発型形成条件、多数者が徐々に形成される条件が徐々型形成条件である (Table 2 参照)。

手続き 実験に先立って約1ヶ月前に、短大のクラス全員 (83名) に公的自己意識尺度の質問紙 (A. H. Buss 1980 の自意識尺度 岩淵・田淵・中里・田中 訳) を行っ

1) 本論文の作成にあたり、ご指導いただきました九州大学狩野素朗教授に感謝いたします。

Table 1 課題 (8 個の情報)

(1)立候補の回数は今回でB, C, 新人, A, 2回目, D, 3回目 (現職) であった
(2)前回の投票率は高かった
(3)住民には知識人も多かった
(4)今回は激戦になるかもしれないと地元00紙は予測した
(5)Cは若く行動力のある人物であった
(6)Bは清廉潔白なイメージで売り込んだ
(7)Aは弁護士出身であった
(8)Dは中央との人脈があり, 熱心な支持層を持っていた

Table 2 12試行での他者4人の回答
突発型形成条件

他 者	B1	B2	B3	B4
1	D	D	D	D
2	A	A	A	A
3	D	D	D	D
4	D	D	D	D
Aの人数	1	1	1	1

徐々型形成条件

他 者	B1	B2	B3	B4
1	D	D	D	D
2	A	A	A	A
3	D	D	D	A
4	D	D	D	D
Aの人数	1	1	2	2

た。この質問紙は実験とは無関係な別の実験のためのものと伝えて行われた。

実験では、被験者についててを隔てて5人横一列に座る。各被験者の机上には自分の回答用押ボタンと、自分を含めた参加者5人全員の回答が表示されるパネルが設置されている。全員が着席しヘッドフォン装着後、次のような教示が行われた。「ある県で十数年前に行われた首長選挙についての8個の情報を読み、当選者を判断する課題である。ABCDという4候補の中から当選者を正確に予測し、正解と思うものを1つ選び、回答用押ボタンを押して答えて下さい」。教示終了後、回答順番を決めるためと称して各被験者に1～5の数字の1つが書いてあるカード5枚の中から1枚を選ばせた。しかし全カードは全て5であり、全被験者の回答順番は常に、操作された4つの回答が表示された後の5番目である。各試行で被験者は、1組(8個)の情報を30秒間読む。この情報は試行ごとにその提示順序が変えてあり、読むた

びに1回判断を行う。各試行で、正解Dでなく多数者と同じAと回答するか否かが同調の指標である。これを12試行行う。

また実験中の第1, 9, 12試行目と実験後の計4回、8個の情報の各々(Table 1)について、どの程度重要な情報だと思うかを7段階で評定させた。これは他者意見の影響を測定する1指標として設定したものである。予備調査において、最初は情報(1)(8)を重要と答える被験者が、A候補を当選者だとする意見に周りの人が一致していく中で、情報(3)(7)へと重みづけを変えるとといった傾向がみられた。周りの人が一致していくにつれて何かそこに重要なものがあるのではないかと、A候補に関連ある情報が重みづけられていくことが考えられるため、この質問を設定した。

12試行の実験終了後、同調行動をとった人がどれくらいその行動を内面的にも受容しているかをみるために、同じ8個の情報を2分間読む時間を与え、個人状況(P)で再度、回答を紙に書くことを求めた。

更に、この同じ課題を100人の人におこなうとしたらABCDと答える人は各々何人だと思うかという質問を行った。これも他者意見の影響を測定する1指標として設定したものである。実験では、他者の前で連続して回答させる。そのために、以前の回答と一貫していないといけないのではないか、あるいは他者の前では自分を一貫性あるものと印象づけたいなどにより、実験中に意見を変えることへの抵抗が生じることもあるのではないかと考えられる。そこで、実験後に実験とは別に個人状況で、しかも自分のこととしてではなく一般的なこととしてきくという形式をとり、どの程度Aという意見に影響されているかを調べた。

その後、実験の本当の主旨を被験者に説明し了承を得た。

結 果

公的自己意識得点 A. H. Buss (1980)の自意識尺度(5段階 岩淵 他 訳) 23項目は私的自己意識因子、公的自己意識因子、社会的不安因子の3因子から成り立つ。その内の公的自己意識因子7項目の得点を取り上げ、各被験者毎に集計した(5×7=最大35点, 1×7=最小5点)。

突発型形成条件と徐々型形成条件にわりあてられた被験者の公的自己意識尺度の平均値は突発型形成条件26.85, 徐々型形成条件28.67であった。*t*検定の結果、両条件の被験者の公的自己意識得点に差はなかった(*t*=1.11, *n. s.*)。そこで両条件の公的自己意識尺度の平均27

点より高い人を公的自己意識高者、27点以下を公的意識低者と分けた。その内訳は以下の通りである。突発型形成条件(公的自己意識高者8名, 低者12名), 徐々型形成条件(高者9名, 低者6名)。

同調行動の変化 12試行を3試行づつB1, B2, B3, B4に分けた。

2条件(突, 徐)×2公的自意識(高低)×4時系列(B1—B4)の同調回数をFig.1に示している。(Fig.1では, 突発型形成条件における公的自己意識高者を突発・公高者群, 突発型形成条件における公的自己意識低者を徐々・公低者群, 徐々型形成条件における公的自己意識高者を徐々・公高者群, 徐々型形成条件における公的自意識低者を徐々・公低者群とした)。分散分析の結果, 突発型形成条件の方が徐々型形成条件より同調行動が多く($F=8.19$, $df=1/31$, $p<.05$), 公的自己意識高者が低者より同調行動が多く($F=13.49$, $df=1/31$, $p<.01$), 時系列と共に同調行動が多くなった($F=44.54$, $df=3/93$, $p<.01$)。更に条件×時系列の交互作用($F=3.29$, $df=3/93$, $p<.05$), 公的自己意識高低×時系列の交互作用($F=3.59$, $df=3/93$, $p<.05$)が見いだされたので, 下位検定を行った。その結果, B1, B

2の時点では突発型形成条件と徐々型形成条件の同調行動の回数に差はなく, B3, B4の時点で突発型形成条件の方が徐々型形成条件より同調行動が多かった(B3; $F=11.17$, $df=1/124$, $p<.01$, B4; $F=9.60$, $df=1/124$, $p<.01$)。突発型形成条件も徐々型形成条件も時系列とともに同調行動が多くなった(突 $F=35.05$, $df=3/39$, $p<.01$, 徐 $F=12.79$, $df=3/93$, $p<.01$)。公的自意識については, B4時点で公的自己意識高者が低者より同調行動が多かった($F=23.71$, $df=1/124$, $p<.01$)。公的自意識高者も低者も時系列と共に同調行動が多くなった(高 $F=34.93$, $df=3/39$, $p<.01$, 低 $F=13.20$, $df=3/93$, $p<.01$)。

更に, 個人状況(P)で被験者に, 再び回答(記入式)させて, 実験中の多数者意見と同じAと答えるか否かを調べた。その結果, Aと答える人は突発型形成条件では65%, 徐々型形成条件では67%で, 条件の間に差は見いだされなかった($\chi^2=0.07$, $df=1$, $n.s.$)。そこで次に条件をこみにして, 公的自意識高者, 低者でAと回答する人数に差があるかを検定した。カイ2乗検定の結果, 公的自意識高者が低者よりAと回答する人が有意に多かった($\chi^2=5.62$, $df=1$, $p<.02$)。

Fig. 1 同調行動の変化

Fig. 2 A候補に関する情報の重要度の変化

情報の重要度 8個の情報 (Table 1) の中で特に、多数者の主張するA候補についての情報である(7)Aは弁護士出身であった、という項目の重要度について検定を行った。公的自己意識高者が低者より重要度の評価が高いという主効果 ($F=5.53$, $df=1/31$, $p<.05$), 時系列と共に評価が上昇するという主効果 ($F=19.14$, $df=3/93$, $p<.01$) がみられた (Fig. 2 参照)。更に条件×時系列の交互作用 ($F=3.29$, $df=3/93$, $p<.05$), 公的自己意識高、低×時系列の交互作用 ($F=2.85$, $df=3/93$, $p<.05$) がみられたので、下位検定を行った。その結果、公的自己意識高者と低者は1試行目で差がなく、9試行目と12試行目と実験後は公的自己意識高者が低者よりA候補に関する情報の重要度評価が高くなっている (9試行目; $F=3.63$, $df=1/124$, $p<.10$, 12試行目; $F=10.10$, $df=1/124$, $p<.01$, 実験後; $F=5.07$, $df=1/124$, $p<.05$)。

100人の配分 100人がこの課題をしたとしたらA B C Dと答える人は何人づついると思うかの設問結果は以下の通りである (Table 3 参照)。多数者の主張するAと、自分が正解と思うDに、何人づつ配分したかを条件2×公的自己意識2 (高低)×2 (AD)の分散分析を行った。その結果、多数者と同じAにDより多く配分するという主効果があった ($F=27.51$, $df=1/31$, $p<.01$)。また公的自己意識2 (高低)×2 (AD)の交互作用が見いだされた ($F=7.28$, $df=1/31$, $p<.05$)。下位検定の結果、Aについては公的自己意識高者は低者より多く配分し ($F=8.93$, $df=1/62$, $p<.01$)、Dについては公的自己意識高者と低者のあいだに差がみられなかった。

考 察

同調率 突発型形成条件と徐々型形成条件の同調率を比較すると、B1、B2では差がなく、B3、B4の時点で突発型形成条件の方が徐々型形成条件より同調率が高くなった。その後、個人状況では再び両条件に差はなかった。

B3で突発型形成条件の方が徐々型形成条件より同調率が高いのは、徐々型形成条件がこの時点で他者4人中3人が一致しているのに対し、突発型形成条件では全員が一致しているためと思われる。しかし、次のB4では両条件とも全員が一致している同一状況である。更にそれ以前での4人の回答を合計すると、突発型形成条件も徐々型形成条件も回答パターンは違っても回答内容は同じである (付表2参照)。にもかかわらずB4では突発型形成条件の方が徐々型形成条件より同調率が高いという結果であった。これより、自分以外の他者が全員一致

Table 3 100人の配分

	突発		徐々	
	A	D	A	D
公高者	67.75	25.63	75.33	20.33
公低者	58.24	27.58	44.67	44.17

しているという同一状況であっても、そこに至るプロセスが問題になるといえるだろう。徐々にある意見に他者が集まってくるよりも、突然一気に一致する方が被験者に与えるインパクトが大きく、全員がその意見に一致した時の同調率を高めるという結果を導くと考えられる。

しかしこれは行動上のことであり、個人状況で再度回答を紙に記入させてみると、両条件で多数者意見と同じAと回答する人数には差がないのである (突発型形成条件65%, 徐々型形成条件67%)。

そこで、これを更に細かく、最終12試行目と個人状況での両条件のA回答率の比較を行った。突発型形成条件のA回答率は12試行目85%, 個人状況65%であった。一方徐々型形成条件では12試行目67%, 個人状況67%であった。突発的に全員一致の規範が形成されると、行動上は多くの同調者を生むが、個人状況になれば、再び意見をもとに戻す人が生ずる。それに比べ、徐々に形成された規範への同調行動は持続し、個人状況でもとに戻る人は0%であった。

また、公的自己意識高者が低者よりB4の時点で同調率が高かった。これは Froming & Carver (1981)、石川ら (1984) の実験とも一致する結果である。自分が人にどうみられるかを強く意識する人は周りの人が全員一致するとこれに強く影響をうけ、自分も同調してしまうのである。この実験は被験者が男女短大生であり、5人集団がクラスメートということもあって、この傾向が強くなったのではないかと考えられる。

さらに、8個の情報の中でA候補に関する情報の重要度は、公的自己意識高者が低者より、9試行目から重要度評価が高くなる傾向があった。多数者が形成され全員一致する中で、公的自己意識高者は早い時点から、外面的行動のみならず、判断の際の情報の重みづけまで変えているのである。

またA B C Dへの100人の配分の結果については、被験者がもともと正しいとおもっていたDには公的自己意識高者も低者も同程度配分していた。しかし、多数者の主張するAには公的自己意識高者が低者より多く配分するという結果であった。多数者にAであると主張されたとき、もともと自分の意見であるDへの評価は変わら

ず、Aへの評価だけ変化させるのである。

以上より、集団形成パターンの違いと公的自己意識の高低が同調行動に異なる効果をもつことが見いだされた。すなわち突然一気に形成された規範に対しては高い同調率が示されるが、内面は行動ほど変化していないことが個人状況での回答より示唆された。より詳しい今後の検討が望まれる。

引用文献

- Buss, A. H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco, Calif.: W. H. Freeman.
- Froming, W. J., & Carver, C. S. 1981 Divergent influences of private and public self-consciousness in a compliance paradigm. *Journal of research in personality*. 15, 159-171.

- 石川直弘・渡辺浪二・押見輝男 1984 同調行動に及ぼす自己意識特性の効果 日本心理学会第48回大会発表論文集 707.
- 岩淵千明・田淵創・中里浩明・田中国夫 1981 自己意識尺度についての研究 日本社会心理学会第22回大会発表論文集
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1985 自己意識尺度の検討 立教大学心理学研究年報 28, 1-15.
- 安井康雄 1985 知覚判断における動的同調過程 心理学研究, 55, 335-341.
- 吉武久美子 1985 多数者意見変動状況において意見のRealityが同調に及ぼす効果 実験社会心理学研究 24, 121-126.

—1988年1月20日 受稿, 1988年4月30日 受理—

THE EFFECTS OF THE CONSENSUS FORMING PATTERNS AND PUBLIC SELF-CONSCIOUSNESS IN MEMBERS' JUDGEMENTS

KUMIKO YOSHITAKE
Kyushu University

ABSTRACT

This experiment was conducted to compare the conformity rates in the case of the suddenly formed consensus and in that of the gradually formed consensus in elective task. Moreover, the effects of public self-consciousness scores in conformity were tested. Subjects were 35 (10 males and 25 females) college students. The results were as follows. The

conformity rates under the suddenly formed consensus condition were higher than that under the gradually formed consensus condition. However, following the experiment, no difference was found between the suddenly formed consensus condition and the gradually formed consensus condition with regard to the amount of private acceptance. And High public self-consciousness scorers conformed more than low scorers.

Key words: conformity, consensus, public self-consciousness, elective task, group.